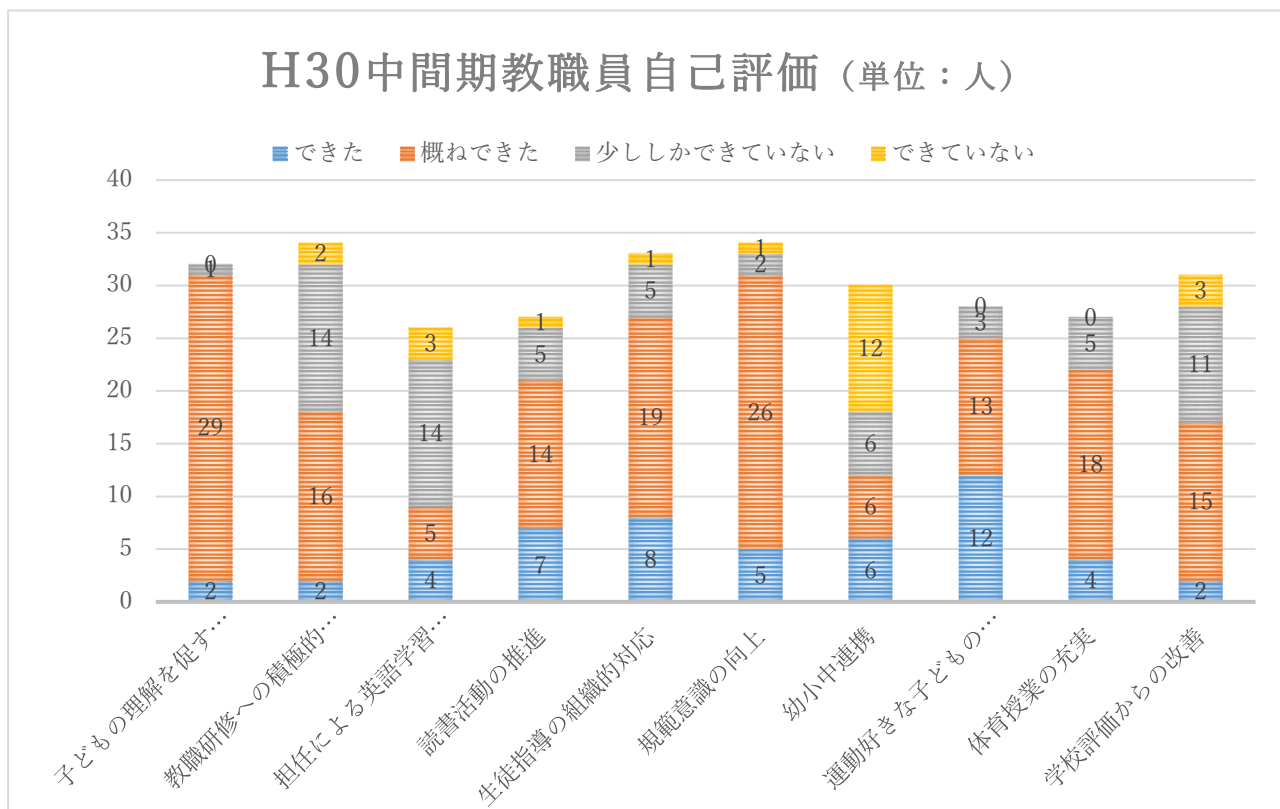


## <H30 年度 中間期 教職員自己評価>



### 1、自ら学び、自ら考える子の育成

7月17日～20日に中間期の自己評価を実施しました。自己評価は学校評価の最も基本となるもので、全教職員が参加し、設定した目標や具体的計画等に照らして、その達成状況や達成に向けた取組の適切さについて評価を行うものです。

上のグラフでは質問項目によって合計人数に差がありますが、これは職務によっては回答できない項目があるためです。どうかご了承ください。

『『分かった』『分かりやすかった』と子どもが感じるような国語や算数の授業を実施できた』という質問に対し、教職員の96.9%が「できた」「概ねできた」と答えました。私たちは授業を行う上で、次の5つの事柄について気を付けています。

導入部分での ①学習課題を提示し、問題意識や学習の見通しを持たせること、

展開部分での ②文章や資料、式などを読み取らせたり、作業的、体験的な活動を設定したりすること。

③児童の間違いを丁寧に取り上げ、解決するように展開すること。

④児童全員の様子を把握して適切に指導すること。

終了部分での ⑤児童自身の言葉でまとめを書かせたり発表させたりすること。

このように日頃からの教職員の意識と教材研究とがこのような高い値になったと思われますので、今後とも1時間の授業を大切にしていきたいと思っております。しかし、児童アンケートでは国語が90.4%の児童、算数は86.4%の児童しか「分かりやすい」と答えておらず、教職員と児童の意識（「分かりやすさ」）に開きがありました。教職員は一人一人をきめ細かく観察し、理解できているのかどうか、つまづきは何か

をもっと把握していかなければならないと感じました。

「教職員の研修に積極的に参加する」ということについては、52.9%の教職員が「できた」「概ねできた」と答えています。1学期は6月に奈良県小学校体育研究会前期研修会が本校で開催され、その時の公開授業に向け、各学年で授業研修に取り組みました。しかしながら1学期は学校行事も多く、また研修会自体もそれほど多く開催されていませんでしたので、研修に行く機会があまりなかったと思います。夏休みは各教科、各分掌で研修の機会が多くありますし、9月以降は各研究団体の研究大会が開催されることも多いです。授業に支障のないように教職員は積極的にこれからも研修を受けていきたいと思えます。

改善する必要があると判断した項目は、「学級担任による英語学習の推進」です。「できた」「概ねできた」と回答したのは34.6%しかありません。生駒市では低学年から英語学習を進めていくために、1・2学年用の教科書を独自に開発し、先日配布されました。ALTとして勤務している本田さん、わくわくイングリッシュ・ティーチャーの安井さんの力を借りながら、全学年の担任が授業の担い手の中心となるよう、早急に取り組んでいかなければなりません。夏休み中の校内研修では先進校からALTと外国語活動の研究主任に来ていただき、担任とALTが授業のどの場面でもどのように関わり合いながら授業を進めていくのかを、実際の授業を行っていただきながら体験しました。2学期以降の英語や外国語活動の授業で活用したいと思えます。

「ボランティアによる読み聞かせを活用し、子どもの本への興味関心を高め、図書室の貸出冊数を伸ばす（読書活動の推進）」については77.8%の教職員が「できた」「概ねできた」と答えています。4月から7月末までの貸出冊数は、1年生1307冊、2年生782冊、3年生1179冊、4年生1247冊、5年生527冊、6年生333冊でした。学校図書館司書の江村さんによると、夏休み中の貸出は低中学年を中心に、ほとんど一人2冊ずつで、選書に時間をかけ、夏休みを心待ちにしているようだということでした。学級単位での積極的図書室の利用が大切かと思われまますので、今後も子どもたちの読書生活をボランティアさんと一緒に教職員は見守っていききたいと思えます。

## 2、他人を思いやる温かい心と感動する豊かな心をもつ子の育成

「不登校等の生徒指導上の問題を特支・通級担当者とも協議し、未然予防や早期発見に努める（不登校等生徒指導上の問題への組織的対応）」については、81.8%の教職員が「できた」「概ねできた」と回答しました。生徒指導上の問題が起こると、校内関係者だけでなく、市教育委員会指導主事や臨床心理士、社会福祉士や精神保健福祉士の資格を持つ専門家にも協力を依頼し、医療機関、児童相談所などと連携して、子どもの家庭環境にも配慮しながらケース会議を行っています。1学期は登下校時のトラブルも多く、民生委員や育友会地区委員とも話し合いました。今後も教職員だけでなく学校外部の方とも連携して安全・安心な学校づくりに努めます。

「してもいい事とやってはいけない事の判断ができ、特に廊下歩行の決まりを守る子どもを育てる（規範意識の向上）」については、91.2%の教職員が「できた」「概ねできた」と答えました。年度当初、職員会議で生徒指導部より「毅然とした指導をどの教師も行わなければ、廊下歩行の問題は解決しない」との説明を受け、教職員全員が意識を新たにしました。廊下歩行の問題だけでなく、生徒指導上の全ての問題において、問題行動を把握してからすぐに解決に導く迅速な行動力と、着実に解決に導く指導手順の確立が少しずつですが学校全体としてできつつあります。

「幼稚園や保育所、こども園、または中学校との円滑な接続」は、「できた」「概ねできた」と回答した教職員が 40.0%とかなり低くなっています。校種間の連携や接続の推進は県及び市の重点課題です。しかし、本校は 1 学期の間、幼稚園、保育園、中学校と十分な打合せができず、事業を進めていくことができなかつたため、このような結果になったと思われまふ。入学した 1 年生が集団行動がとれない、授業中に座ってられない、教師の話が聞けない等学校生活になじめない状態を「小 1 プロブレム」と言いますが、それらの解消のため、本年度はいこま子ども園だけでなく、中保育園とも 1 年生は交流しています。ただ、主となる担当のコーディネーターを校務分掌に位置付けていませんので、校種間の連絡調整が学年任せになっており、組織的な改革もこれからは必要ではないかと思ひました。

### 3、健康でたくましい子の育成

「なかまとともに楽しみながら運動する子どもを育てる（運動好きな子どもの育成）」の項目には、教職員の 89.3%が「できた」「概ねできた」と答えました。しかし、児童アンケートで「休み時間は外に出て遊んでいる」子どもは 68.6%しかいません。体育学習時以外でも、体を動かすことが好きな児童はどんどん外に出て遊ぼうとするはずです。教職員が「外で遊ぼう」という声掛けだけでなく、学級みんなで取り組める遊びを昼休みに提案するなどの工夫が必要だと思ひました。

「体育の授業研究で培った知識やスキルを活かし、自信をもって授業を行えるようになる（体育授業の充実）」という項目には、81.5%の教職員が「できた」「概ねできた」と答えました。児童アンケートでも 90%以上の子どもが体育授業に満足しています。奈良県小学校体育研究会の公開授業は終わりましたが、2 学期以降も一人一人の教職員が体育の授業研究に取り組んでいきたいと思ひます。

### 4、評価を活かした学校運営

「児童の様子やアンケート、学力テスト等の分析と考察を行い、丁寧な自己評価からの学校改善をめざす（学校評価制度の推進）」に「できた」「概ねできた」と答えた教職員は 54.8%です。児童の学習状況や言動、健康、友達関係、家庭環境について、学級担任はもちろん、専科教員や特別支援学級担任、補助として授業に入っている支援員やサポーター、通級指導教員が情報を共有しながら指導にあたっています。また、児童アンケートや学力テストの分析もすでに行いました。これら子どもの状況や社会環境、保護者や地域住民の声など、学校教育活動の効果や評価は様々な場面で現れてきます。見逃すことなく、聞き逃すことなく、評価に向き合い、改善を目指してこれからも学校運営に取り組んでいきたいと思ひます。